

指名コンペティションの実施結果について

国際交流基金は、2010 年 4 月、国際展事業委員会*からの推薦に基づき、7 名のコミッショナー候補を指名し、展示企画に関するコンペティションへの参加を依頼しました。同年 6 月中旬、6 名の方から以下の通り応募案をいただきました。

(応募者名の 50 音順、敬称略)

応募者氏名	テーマ・作家
植松 由佳 (国立国際美術館主任研究員)	束芋「超ガラパゴス・シンドローム」(仮)
大島 賛都 (サントリーミュージアム天保山学芸員)	木村友紀の個展 —桂離宮をテーマとした展示案
片岡 真実 (森美術館シニアキュレーター)	塩田千春
蔵屋 美香 (東京国立近代美術館美術課長)	田中功起
光田 由里 (渋谷区立松涛美術館学芸員)	Bright Matter: high density of vacancy 町田久美 + さかぎしよしおう
南 雄介 (国立新美術館学芸課長)	中村一美 存在の鳥——破籠にて Kazumi Nakamura: Birds in their Existence, in the Broken Cage

同委員会での選考会議においては、各応募者へのインタビューなども実施し、議論を重ねた結果、植松由香氏の束芋「超ガラパゴス・シンドローム」展に決定いたしました。

* 国際展事業委員会

国際交流基金理事長の諮問に応じ、基金の国際展事業及び関連の業務について意見を述べ、また海外で開催される国際展のうち国別参加部門に出展するにあたってコミッショナー候補等を推薦する委員会です。内外での美術展実施の実務経験を有し、また、国際展の動向や現代のアートシーンに広く精通した専門家から、理事長が委嘱する委員 6 人以内で構成されています。

各委員の選評は、以下のとおりです。(委員名の 50 音順、敬称略)

五十嵐 太郎 (東北大学教授)

コミッショナーのコンペにおいて、6 名の候補者が推薦した作家は、年齢や作風に幅があるとはいえ、いずれも力をもったアーティストであり、誰もが選ばれてもおかしくないと思う。ゆえに、今回は作家が誰なのか、というよりも、候補者から出されたコンセプトと会場構成に重点を置いて、考えることにした。筆者が美術の専門ではなく、建築の専門であることも、その理由である。まず光田由里氏は、町田久美 + さかぎしよしおうという興味深い組み合わせを提案したが、「Bright

Matter: high density of vacancy」の難解なコンセプトを表現するのが難しいと判断した。そして南雄介氏による中村一美の展示プランは、日本館の壁全体に手を加える意欲的なものだったが、そこに絵画作品がかけられるために、図と地の新しい関係が相乗効果をもたらすのか、疑問だった。

大島賛都氏は、海外に受容される日本の現代美術の潮流を批判しつつ、桂離宮をテーマとしながら日本館の内外を使う木村友紀の企画を提案した。もうひとつの日本的なものの概念や展示の具体的なイメージについてはやや説明不足であり、未知数だったが、新鮮な魅力も感じさせるプランである。片岡真実氏による塩田千春の展示案は、これまでの実績から実に安心できるものだったが、一方で起きる出来事がわかってしまうことが気になった。また塩田の劇的な作品には、もっと大きな空間が必要ではないだろうか。

植松由佳氏による束芋「超ガラパゴス・シンドローム（仮）」は、グローバリズムと日本の新しい関係を考えるうえで、今回提案されたなかで個人的にもっともおもしろいコンセプトである。ただし、日本館の内部空間と湾曲したスクリーンの相性が良いのか確信をもてなかった。束芋ならば、例えば、風車形のプランを大きな四畳半と見立てるような会場構成もありえたかもしれない。蔵屋美香氏は、田中功起がリサイクル品で会場を設営し、世界共通のモノトイレットペーパーめぐる 1000 以上もの映像作品を展示するプランだった。チープさを徹底することにより、悪い場所としての日本館を使いたおす方向性は興味深い。以上の二案は、どちらが選ばれても話題を呼ぶ展示になると考えた。

逢坂 恵理子（横浜美術館長）

ヴェネチア・ビエンナーレ 2011 の日本館コミッショナー選考は指名コンペ方式により、6 人から提案が出された。メディアは絵画、陶、映像、インスタレーションと多様だったが、1970 年代生まれのアーティストが 7 人中 5 人であったこと、そして映像を駆使しつつもインスタレーションとしての空間構成を得意とするアーティストが 3 人ノミネートされたことは、日本館の展示に、次世代作家を積極的に起用しようとする傾向を示すものとなった。また、短期間の依頼にもかかわらず、多くの提案者が展示模型を用意するなど、プレゼンテーションの手法にも次世代らしい手際の良さを感じさせた。

町田久美とさかぎしよしおの組み合わせは、意表をつく提案で、ヴェニス・ビエンナーレという祝祭の場に対する、光田由里氏の反旗的洞察には共感を覚えた。実見したい提案であったが、しかし、会場の環境を考慮すると日本画の展示はリスクがあると判断した。

前回に引き続き中村一美を推した南雄介氏の提案は、絵画への執念と意気込みを感じさせた。壁面をすべて朱と金で塗装し、その上に 300 号の絵画 29 点を配置する、絢爛ともいえる空間構成は、絵画をめぐるヴェネチアと日本、伝統と現代など様々な文脈を読み込んだ思考の成果であるが、その企図が伝わるかという点では難しさを感じた。

大島賛都氏による木村友紀展は、提案した「日本的センシビリティ」をどのように実現するのか、具体的なプランが見えにくかったのは残念である。

蔵屋美香氏、植松由佳氏、片岡真実氏からは、それぞれ田中功起、束芋、塩田千春の個展が提出された。この 3 人は、若手ながらすでに国内外での実績を積んでいる注目度の高いアーティストで、いずれのプランも魅力的であった。甲乙つけがたいなか、協議の結果、植松案の束芋が選ばれたが、片岡氏が提案した塩田千春展も捨てがたかったことを付しておきたい。

笠原 美智子（東京都写真美術館事業企画課長）

第 54 回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館のコミッショナー選考は、世代交代を印象付けるものとなった。コミッショナー候補の多くが 40 代前半であり、彼らを選出した作家の 7 人中 5 人までが 1970 年代前半生まれだった。一概に若さが新鮮なヴィジョンを担保するとは限らないが、今回のプレゼンテーションについては機能していたと思う。

光田由里氏の「Bright Matter: high density of vacancy 町田久美＋さかぎしよしお」展は、展覧会のコンセプトが洗練されていて、是非、見てみたいと思わせるものだった。しかし、100 近くの展覧会が同時並行するヴェネチアという場を考えると、その中で日本館をアピールするために二人展は不利だといわざるを得なかった。

南雄介氏の「中村一美 存在の鳥一破籠にて」展は、作家の力量は疑うべくもなく、イタリア・ルネッサンスとの関係は明確であるにしろ、なぜ、2011 年に開催しなければならないのか疑問に思った。大島賛都氏の「木村友紀－桂離宮をテーマにした展示」は、コンセプトが未消化だったと思う。

最後まで残った蔵屋美香氏の「田中功起」展、植松由佳氏の「束芋 超ガラパゴス・シンドローム」展、片岡真実氏の「塩田千春」展は、作家のキャリアや力量、国際的な評価を考えてもどれも甲乙付けがたく、日本の現代美術を代表するに相応しい企画だと思った。その中で植松由佳氏の「束芋 超ガラパゴス・シンドローム」展が選出されたのは、国際的な美術の言語を駆使しながらも、日本の独

自性について風刺に満ちた考察をする企画のおもしろさと、常に高いレベルの作品と展示空間を創出する作家への期待からであったと思う。

河本 信治（京都国立近代美術館特任研究員）

6人から提示されたプランはどれも、現状への鋭い批評を孕む説得力を持つ提案であり、次回の日本館の展示として疑念はなかった。私の判断基準は、候補作家とプランとの整合性について、候補コミッショナーのキュレーションへの、共感度の差であった。詳細な展示プランの提示を求め、その完成度も判断要素であった前回までに比べ、その条件を外した今回は、より深く候補者の構想内容について議論を重ねることができた。とても好ましい変更であったと思う。光田由里（町田久実＋さかぎしよしおう）は、繊細な構想の中にヴェニス祝祭性に対する強い批評を込めたことは理解できるが、「返し技」という印象を拭えなかった。彼女はたぶん、直球勝負でその能力を発揮するような気がする。南雄介（中村一美）は前回と同じ作家の提案であり、より深く精緻に構想され、その状況分析にも共感できる場所が多かった。ただ、展示での過剰さについては再考が必要かもしれない。大島賛都（木村友紀）のキュレーターとしての立ち位置には共感できる部分が多く彼の大きな潜在能力を感じさせたが、その可能性はたぶん、別の出会いによって発揮されるのだと思う。蔵屋美香（田中功起）は個人的に最も評価したコンセプト・プランであった。ただ、日本館の現実を脱構築する展示プランは疑問であった。植松由佳（束芋）の提案は、現時点で考え得る最も妥当で最も安全な提案の一つであろう。

「挑戦的要素」はたぶん、作家の作品が担うのだろう。片岡真実（塩田千春）の提案は、ヴェニス祝祭性・スペクタクル性を批判的に分析し、それに対して同じ文法によって挑もうとする意気込みが感じられた。匿名的集団記憶を刺激する旅行鞆の集積＋作家の署名でありスペクタクル性を強調する空間を満たす黒い毛糸の線など、明快な説明は一方で私に、「塩田作品への評価コードはいったい何なのだろう？」という疑問を抱かせてしまった。私は審査の中間投票では、南、蔵屋、植松に投じた。その後は得点上位の蔵屋、植松、片岡の3プランを中心に議論が進められた。植松＋束芋プランの決定は、極めて自然で妥当なものであったと思う。

最終的にコンペへの参加を受諾された6人のコミッショナー候補者の経験と能力について全く疑念はなく、提示されたプランの魅力と実現に向けての現実性のみを判断するよう心がけたつもりである。加えて、「一観衆としてビエンナーレ会場で（提示されたプランに）出会ったとき、私はどのように感じ、考えるであろうか」ということが判断の要素となった。

塩田 純一（青森県立美術館美術統括監）

今回6氏による提案はいずれも今日の日本美術が抱える問題点を踏まえつつ、ヴェネチアという場においていかに独自性を発揮しようかという観点からなされた、真摯で意欲的なものであった。

日本の現代美術紹介の現状についての批判から、大島賛都氏が最近の若い世代に見られる、ものへの拘泥、ある種のマテリアリズム的傾向に着目した点は大いに共感できる。ただし、その前提に立つとき、木村友紀という選択が適切なものかについては疑問が残った。桂離宮をモチーフとした展示プラン自体、そして展示の一部であるというアーティストブックとの展示との関係が、分かりづらく、些か普遍性を欠くように感じた。

光田由里氏のプランは独自の美学に基づき、町田久美の絵画とさかぎしよしおうの磁土の作品を配し、光の充満する寡黙で瞑想的な空間を現出させるというものであった。その反スペクタクルの主張はよく理解できるが、なぜ両名の組み合わせかという点に関して、唐突さは否めなかった。

前回に続いて中村一美を推す南雄介氏のプランは、日本館の壁面全体を赤地に斜行グリッドのウォールペインティングで埋め尽くし、その上に大画面のタブローを隙間なく展示するという大胆なものであった。モダニズム絵画批判、ホワイトキューブ信仰への批判としても読めるそのプランは、ヴェネチアでこのところ紹介の機会のない日本の絵画への熱い思いとあいまって個人的には強く惹かれた。しかし、展示における過剰性が果たして作品を良く見せる方向に作用するものかどうか確信が持てなかった。

片岡真実氏の塩田千春のプランは、シンプルで力強く、作家がベルリン在住であることから実施に際しても問題は少ない。スーツケースの集積は旅行、移動を連想させるし、当然のことながら、強制収容所におけるホロコーストの記憶も連想させるであろう。そのことは多義的な意味の層を現出させる一方で、ヨーロッパの文脈においては表層的と受け止められかねないという一抹の懸念も残った。

植松由佳氏の束芋のプランは、現代日本文化のある側面の批評的提示とでもいうべきもので、一定の成果は期待できるだろう。また既にヴェネチアでは実績のある作家であるだけに、安心感もある。ただ私自身は、そのことがある種の既視感を生じ、結果的にやや新鮮味に欠ける選択になるのではないかという杞憂をぬぐえなかった。

蔵屋美香氏は、大島氏と同様最近の若い作家に見られる事物に拘泥する傾向に着目した上で、田中功起を選んでいる。パヴィリオン内外に廃材によるインスタレーションを展開し、トイレットペーパーを素材とした即物的な彫刻的所作の映像を随所で流すという構成で、軽やかで自由な物体の詩学とでも呼びうるものが効果的に表出されるように思われた。インスタレーションと映像が有機的に結びつくかという点に関し危惧の念も語られたが、私はむしろこの作家は空間を使いこなす卓越した能力の持ち主であるし、何よりも国際的なアートシーンにはフレッシュに映るであろうと考え、最終的に蔵屋案を推した。

本江 邦夫（多摩美術大学教授）

ヴェネチアの日本館はかなり特異な空間だから、そこでの展示そのものにインスタレーション的な要素が濃厚に漂うのは致し方の無いところであろう。今回の選考は作品と空間の関係をいかに把握するかというじつに基本的な点で多様な評価に分かれたように思う。

前回に引き続き、日本の現代絵画を代表する一人、中村一美さんとともに応募した南雄介さんの構想は、すべての壁をカドミウム・オレンジで塗装し、その上に東洋的な美学を見据えたこの画家の造形のある意味で要素をなす斜行グリッドを全面に展開する意欲的な空間づくりで特筆すべきものだが、そうした過剰さが逆に絵画そのものの存在感を薄める印象をあたえたのはまことに残念である。これとは逆に、謎の星間物質ダーク・マターを概念的に反転させた、光田由里さんの *Bright Matter* の発想は、じつに興味深いものだが具体的な展示効果の点で予測しがたいところがあり、強く推すわけにはいかなかった。同じことは、木村友紀さんとともに応募した大島賛都さんについても言えるだろう。桂離宮というテーマがあまりに観念的で具体性を欠いているのではないか。田中功起さんのとぼけた味を全面に押し出そうとする蔵屋美香さんの提案にしても、その意欲は買うが、現実空間の制約が厳しすぎるように思えた。

国際展ですでに実績のある塩田千春さんを持ち出した片岡真実さんの、塩田さん自身がその中に投げ込まれている現代的ディアスポラ（離散）の不安を問いかける提示そのものは実に手堅く鮮烈なものだが、革製のスーツケースを大量に使用する点に妙に常套的なものを感じ、最後までこれを支持することはできなかった。

今日的な問題意識という点で頭一つ抜け出していたのは、その年齢に比して輝かしい出品歴をもつ束芋さんの「超ガラパゴス・シンドローム」とともに登場した植松由佳さんではなかったか。多文化的な文化の交錯するヴェネチアで、日本的なものの特異と普遍を美的に再考する、これは良い機会になると思う。

以上